今後10年の長崎を見据えて今何をなすべきか

◆長崎経済同友会6月例会パネルディスカッション◆

広告（製作 長崎新聞社広告局）

長崎経済同友会（代表幹事・藤原和人氏、扇道徳氏、辻洋三氏の3人）の6月例会が21日、長崎市内であり、「今後10年の長崎を見据えて」をテーマにパネルディスカッションを繰り広げた。人口減少などが懸念される本県の今後に向けた活動の在り方を探るのが狙いで、会員約80人が出席。同会内の8専門委員会のうち4委員会の代表をパネリストに、地域活性化策の鍵を握る「人材の活用」に焦点を絞り意見を交わした。

◆コーディネーター
深野　浩平
◆パネリスト
田中　直英（経済活性化委員会）
殿村　育生（肥前地域振興委員会）
河端　理（観光振興委員会）
石橋　洋志（九州はひとつ委員会）

人材の活用を焦点に意見を交わす長崎経済同友会のパネルディスカッション

深野　浩平氏

深野　10年後の長崎を元気にするために一番重要なのは人材。今回は人をさらに「わかもん」「よそもん」「のぼせもん」の3つのテーマに分けて議論を進めたい。まず将来の長崎県を担っていく「わかもん」について。一番の問題は「わかもん」の県外流出。どうやって歯止めをかけるのか。まず河端さんから。

河端　学生の意識を少しでも変えさせていくには、長崎を代表する企業、各界のリーダーの方々の意識の持ち方がキーポイントになる。日常からビジネス界のリーダーが、長崎の課題などを若い人たちと共有する場を持ってほしい。将来を見据えた時には不可欠だと思う。

田中　商店街の立場で話しをすると、昭和60年に8340店あった商店数が平成16年には6257店に減り、従業員数も減少。販売総額もピーク時の91%に減少している。一方でいい教育を受け、いい大学に行き、一流企業に入った多くの若い人たちが、給料が半分になっても長崎に帰って来て会社を継ぎ、将来への危機感をしっかり持って頑張っている。家業の伝統を絶やしたくない、親の希望に応えたい、変革したいなどさまざま。今後「やりがい」がいろんなジャンルで議論されるべきではないかと思う。

石橋　いい人材をどう確保するのかを考えたとき、経営者自らが学生と接する機会、大学の先生と接する機会をたくさん持つことでいい学生が来てくれる。現実に見ており結果的に、将来いい会社に育っていくことにつながる。

殿村　20年前の話だが、ある人が「一番もうかるのはよその人相手の商売。その地方で一番大きな商売をしているのは、土地の人を使って世界中に売るものを持っている企業が立地している所」と言っていた。まさに三菱重工長崎造船所がある長崎だ。今は大型の雇用創出ができる企業が少なくなっているが、潜在的な技術力が長崎にはある。地域が持つ能力をうまく活用する仕組みが必要と思う。大学生は県外志向が強いが、高校生も地元定着率が悪いというデータもある。若い人たちを早い時期に違う部署の体験をさせ、各部署での連携と役割を感じさせることが必要。

深野　皆さんが若者であったころと比較して、今の若い人たちとどう違っているのか。今の若い人に対する思いを。

田中　私の若いころはまだ高度成長時代。商売をしながら青年会議所活動に割く時間やお金があった。しかし今の若い人たちは自分の企業を守る部分で余裕がない。かわいそうと思う。あるシンクタンクが長崎の暮らしやすさというデータを取っており、東京を100とした場合の長崎の所得は76から77。しかし物価や住宅取得など総合的なデータを勘案すると東京圏との所得格差はない。一生という長い期間で考えれば長崎県の生活の方が経済的にゆとりがあるという。古いデータだが現段階でもう一度検証して、若者にも認識してもらうことも必要だ。

各代表が〝のぼせもん〟に　田中

〝よそもん〟に見習うべき　殿村

殿村　育生氏

田中　直英氏

若者たちと交流する場を　河端

活躍した人選び表彰して　石橋

河端　理氏

石橋　洋志氏

河端　理氏

深野　次のテーマは「よそもん」。ここでは長崎県内の高校を卒業した人がじげもん、県外の高校を卒業した人がよそもん、というイメージで話しを進めたい。よそもんの強みは県外とのネットワークがあり長崎を冷静、かつ客観的に評価できる人材といえそうだが。

河端　よそもんの中にはこれから先、外国人、特にアジアの人たちとの交流も大きな課題であり取り組まなければいけない点だと思う。例えば、長崎―上海間は週2便国際線を運行しているが、岡山県の岡山―上海の間は当初週2便でスタートし平成16年から毎日飛んでいる。7月末には大連、北京便も開設する。調べてみると、空港利用促進にあって県境をほとんど意識していない。中国地方から四国の高松まで含めた企業誘致や企業の中国進出など、積極的に交流に取り組んでいる。長崎県も佐賀県を含め、県全体の取り組みとして、外国とのかかわりを観光促進の側面だけでなく取り組んでいく必要がある。

田中　少し古い話になるが平成11年に同友会のじげもんと、よそもんのメンバーで「長崎の情報化」の提言をまとめた。同友会こそよそもんとじげもんの交流の拠点ではないかと思う。私はじげもんとして反省すべき点がある。長崎商工会議所で長崎歴史文化観光検定をこれまで2回実施したが、地元の経営者より出先の支店長、支社長さんたちがはるかに熱心だった。

深野　石橋さんは長崎の出身ではないと聞いたが。

石橋　長崎に来て30年以上になる。実際じげもんの気持ちでいるが、じげもんの人と話をすると、意外とじげもんの人が長崎のこと知らない。昨年のさるく博、長崎検定であらためて長崎のことを知った人が多いと思う。自分の街を知ることが「ふるさと愛」に結果としてつながる。そこで長崎で活動している企業は1年間に1人以上、長崎観光検定の合格者を育てていくことを提案したい。

殿村　私もじげもん。他地域のまちづくりの工夫やアイデアを参考にする意味では「大海を知った井の中のかわず」になるべき。長崎で活躍されているよそもんの方は、長崎が気づいていない情報、長崎が改善すべき点など客観的に評価できる人たちだと思う。一方で西洋から技術を取り入れた肥前の国を考えたとき長崎、佐賀の歴史的背景の中には必ず交流があった。産業と観光の振興を軸に長崎と佐賀の交流を深める必要がある。

深野　次のテーマ「のぼせもん」に移りたい。「損得勘定抜きで物事に打ち込める、パワーを備えた人たち」だと思う。長崎ののぼせもんの方々はすごく純粋でやるべきことには熱中するが、地域づくり、まちづくりにつながっているのぼせもんはそれほど多くないのではないかと思うが。

田中　友人の中で全国に通用するのぼせもんが2人いる。「佐世保の冬はなんもなかけん」「新地の先祖のまつりを大切にしよう」という動機でスタートし最終的には地域の活性化に寄与した。私はのぼせもんというより、彼らは地域のいい意味でのリーダーと思う。彼らには理念、信念があった。そしてサポートしてくれる仲間がいた。それをいいかえて行政、商工会、商店街などの長、つまり地域のいろんな団体のリーダーがいい意味でのぼせもんになって強力なリーダーシップを発揮すれば長崎は変わるのではないか。

河端　ここに新聞のコピーが二つある。一つは佐賀県が東京や大阪にある事務所を営業本部に名前を変えた。もう一つは、長崎県は東京にアンテナショップはないが、やっと設置する方針を決めたという内容。東京、大阪の人たちには長崎くんちは有名だが、さるく博、ランタンフェスティバルはほとんど知らない。さるく博は市民を巻き込んでじげもんや地元の人たちの動きと相まって大きなムーブメントになったことは記憶に新しい。ぜひこれは成功例として、ますます面や奥行きの拡大を進めて、ぜひ官民一体となって長崎ブランドを県外に発信、PRする機会を増やしてほしい。のぼせもんのパワーを内だけにむけるのではなく、そのエネルギーをマーケットとしての大都市に知れ渡るように利用していくべきと思う。

深野　のぼせもんを外、例えば中国に連れて行き、長崎をPRすることも一つの手でないか。

会場から　県外出身でありながらじげもん意識で頑張っている人、長崎出身でありながら県外で活躍しているよそもんの方はたくさんいる。この人たちはいろんな場面で長崎の良さを発信、PRしてくれている。特に観光面ではこの発信力が一つの大きな決め手になる。ところが長崎のじげもんはそこまで発信していない気がする。

深野　最後にこれまでの議論を踏まえて少しでも経済同友会でやっていけるようなことがないか、アクションにつながるような提言があればどうぞ。

石橋　わかもん、よそもん、のぼせもんのそれぞれのリーダーシップを取る人が特に必要ではないかと思う。そこで一年間にそれぞれのジャンルで特に活躍した人をMVPとして選び経済同友会大賞を与え、もっと活躍していただくようにしていけば必然的に活性化はしていくのではないかと思う。

河端　長崎で成功されてきた方、活躍している年長者の人たちが若い世代の人たちと語りあえる場を提案したい。一方的に講義をするのではなくて、キャッチボールできる場を通じて、長崎にはこんな立派なリーダーがいるんだということを、じげもん、よそもんを問わず、今長崎にいる人たちで伝授していく場があってもいい。

田中　人口を増やすことは非常に難しいが、交流人口を増やすことはいろんな方法があると思う。例えば、長崎の特殊性を生かした外国人留学生制度創設とか、よそもんとの交流ではほかにない切り口を探す事も大事。

深野　今三つの意見がでた。うち二つは同友会としてできそうな話しではないか。同友会としてわかもん、よそもん、のぼせもんに対するMVPをあげるということ、同友会としてここにいる方々と若い方々との接点の場を作る、どんな形がいいか具体的なことはこれからだが、この会の結論として事務局でできないかどうか投げかけてみたい。本日はどうもありがとうございました。